

ヘブライ人への手紙 11:1～4

「神の御子は語る」

2025年6月22日(神奈川連合長老会講壇交換)

鈴木憲二（大磯教会）

はじめに

今朝は、神奈川連合長老会の講壇交換で藤沢北教会の礼拝で説教できますことを光栄に思います。実は藤沢北教会で説教させていただくのは二度目でありまして、もう13年前ですが、やはり神奈川連合長老会の講壇交換で説教いたしました。しかし、今回は大磯教会が教会として正式に加盟して初めての講壇交換ということで、ようやくお仲間に入れていただいたという想いでひととき感慨深いものがあります。そして、今朝は、同一の新約聖書の御言葉からその恵みに与っており、いつもと違う教会でみ言葉を語ることは、意義あることであり、感謝です。では早速、今朝、私たちに与えられていますコリントの信徒への手紙ー15章1節から11節を通して御言葉の恵みに与りたいと思います。

死は天国への道

ところで、私自身のことを少しお話しさせていただくことをお許し願いたいのですが、私は、いろいろな仕事を経て、伝道師として大磯教会に初めて赴任したのが61才で、牧師になったのが65才ですから遅咲きの牧師、いやいまだ咲いてはいないかもしれませんが、牧会生活が16年目に入っています。信徒として外から見ていた牧師は、尊敬する先生であり、もっとしっかりと聖書の説き明かしを聴いておけばよかったと反省しております。ところで牧師の生活は主日の説教や集会、そして祈祷会しか仕事がないと思っておりました。葬儀などめったになかったのですが、自分が牧師になって、特に最近は葬儀や病気のお見舞いも多く、人間の死に立ち会う機会が多い仕事であるという認識を新たにしています。そして私自身も棺に入る時期が確実に近づいているのは確かでしょう。生きている人間にとって一番関係深いものは死であります。なるべく考えないようにしていても、あらゆる悲惨の元もこの死に他なりません。死は貧富、教養、地位、年齢に関係なく人間を襲い、死ほど平等なものはないのです。私たちは死を免れることができないし、死に直面するとき、絶望のどん底に落ち込むのではないかと不安を感じているのです。抗うことのできない死という巨大な力。その力から解放されることは出来るのでしょうか。それが実に聖書の中にある、とパウロは告げているのです。キリストを信じて罪赦された者は、たとえ死んでも生きる。つまり復活するのです。神の言葉である聖書によれば、キリスト者にとって死は天国への道です。キリストが再臨するとき、その時私たちは栄光の体

に変えられるのです。

死者が復活する希望

パウロは 15 章で復活について語っています。復活は、十字架と並んでパウロの語る福音の中心です。キリストは、御自分を信じる者がご自分と同じように復活するための初穂とし復活されました。ところが、今日の個所のすぐ後、12 節でパウロはこう言っています。

キリストは死者の中から復活した、と宣べ伝えられているのに、あなたがたの中のある者

が、死者の復活などない、と言っているのはどういうわけですか。

つまり、コリント教会の中に、人間の復活を疑う者がいることを知らされたので、パウロは、それを放ってはおかず、手紙を書いて、力を込めて復活の問題を論じているのです。

主イエス・キリストを信じ、その救いにあずかって生き、死んだ者が、この世の終わりに、キリストがもう一度来られる再臨の時に復活し、永遠の命を生きる新しい体を与えられるということが私たちの望みです。先ほど言いましたように、最近、教会で葬儀を司式することが多く、葬儀説教で私はそのことを語っています。最後に必ずこう結びます。「地上での交わりに感謝し、再びキリストが来られる時、永遠のみ国に共に相まみえる日を望み、共に愛し合いながら平和な日々が送られることを祈りたいと思います。」と。けれども、どうしてそのような究極的な希望について、常識的に考えれば、誰も見たことがなく、荒唐無稽なことのようと思われることを、何を根拠に信じることができるのでしょうか。そのことをはっきりさせるためにパウロは、この復活の信仰を語る前に、主イエスをキリスト、即ち救い主と信じる教会の信仰の根本を確認することから始めるのです。教会の信仰は「福音」を信じる信仰です。パウロが宣べ伝え、コリントの人々が信じて教会が生まれたのはこの福音であり、そこにこそ、死者の復活という究極的な希望の根拠があるのです。それゆえに先ずは、その福音の内容をはっきりさせなければなりません。福音が明確にならないと、死者の復活という究極的な希望も見失われてしまうのです。コリント教会の中には、12 節にあるように、「死者の復活などない」と言う人が現れてきていました。そういうことが起るのは、福音が見失われているからだと言っているとパウロは考えているのです。それゆえに、キリストの福音を先ずしっかりと確認しなければならない、そのことを語っているのが、この 15 章の 1 節から 11 節なのです。

駅伝の襷のように

パウロはここで、キリストの福音の根本を、「最も大切なこと」と言い表しています。

それは、これなしには全てが無になってしまうような本質的なこと、という意味です。その最も大切なことを私はあなたがたに伝え、あなたがたはそれを信じて信仰者になったのだ、と言っているのです。そしてパウロは、それは私自身も受けたものだと言っています。つまりパウロ自身も、この最も大切なこと、福音の根本を、もともと知っていたわけではないし、あるいは自分で考えたり発見したのでもなくて、人から受け、伝えられ、聞かされたのです。福音は、大伝道者パウロでさえも、自分で発見したり、考えて到達できるようなものではないのです。福音は、教会において、信仰の先輩から教えてもらわなければ分からないものです。つまり私たちの信仰は、自分で悟りを開いたり、修行してある境地に到達するという信仰ではなくて、聞いたことを信じ、受け入れる信仰なのです。パウロも、先に信仰を与えられていた人々から聞いたことを信じて信仰者になり、その聞いたことを人々に宣べ伝えたのです。福音はそのように、人から人へ、教会から教会へと受け継がれ、継承されていきます。そのようにして今私たちのところにまで伝えられてきました。私たちはその福音を受け取り、それを他の人々に、次の世代に受け渡していくのです。そういう意味で私たちの信仰の歩みは、駅伝の選手のようなものだ、と、何人もの説教者はこの箇所の説明で語っています。まさにそうだと思います。引き継いだ信仰という襷をしっかりと持って、自分の走るべき期間を走り、それを次の選手に渡していくのです。皆さんの中にも箱根駅伝のファンは多いでしょう。まさにお正月の湘南の最大関心事です。遊行寺の坂から茅ヶ崎の海岸へ走る選手の颯爽とした走りをテレビ中継で見ますが、平塚中継所で襷を受けた走者は、国道一号線に入り大磯教会の目の前を通過して行きます。私も毎年、どの選手をも応援しています。

最も重要なこと

パウロが最も重要なこととして教会に伝えたことは、パウロ自らが考え出したり思い付きを語ったりしたものではなく、パウロ自身も受けたもので、主イエスと直接生活を共にした弟子たちから伝えられたこと、すなわち初代教会の伝承となっていた事柄でした。その内容は、「キリストが、聖書に書いてあるとおりのわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおりの三日目に復活したこと、ケファに現れ、その後十二人に現れたこと」です。パウロはこの教えを聞いて信じ、それを伝えたのです。注目すべきことは、教会が受け継いでいる信仰は、救われるためには、あるいは神の恵みを受けるためには、こうすればよい、というノウハウの教え、言い換えれば倫理道德の教えではないのです。教会が「最も大切なこと」として伝えているのは、そのようなノウハウ、倫理道德ではなくて、キリストが私たちの罪のために死んだこと、葬られたこと、三日目に復活したこと、弟子たちに現れたことです。これはつまり、救われるために私たち

がどうしたらよいか、ではなくて、神が、私たちの救いのために何をして下さったか、ということです。教会の信仰において「最も大切なこと」は、私たちが何をするかではなくて、神が何をして下さったかなのです。それゆえにそれを「福音」即ち「よい知らせ、喜ばしい知らせ」と言うのです。救われるためにこうしなさい、という教えは福音ではありません。福音と倫理道德は違うのです。私たちが自分の救いのために何かをするよりも前に、神が、私たちの救いのために必要な全てのことをして下さった、それが福音です。喜ばしい知らせです。パウロは、この福音を聞いて信じ、この福音によって生かされ、この福音を宣べ伝えたのです。その福音の大切なことの第一は、キリストの死についての福音です。「キリストが、聖書に書てあるとおりにわたしたちの罪のために死んだこと」を伝えています。イエス・キリストが十字架で死んだのは確実な歴史的出来事ではありますが、それは、私たちの罪のために死なれたということが大切なことです。第二は「葬られたこと」。つまりキリストの埋葬は、キリストの死亡の確かさを示すうえで重要です。死後のキリストの復活の事実を示すことは、同時に私たちが死んで葬られてもキリストと同じように復活することの保証になるのです。キリストは実は十字架で死ななかったのだ、仮死状態にあっただけなのだ、という見方に対する反証となるのです。第三は、「三日目に復活したこと」です。これは第一の「十字架の死」と並んで重要なことですから、「聖書に書いてあるとおり」と再びパウロは言っているのです。このことは旧約聖書のどこに書いてあるのか。その一つとして挙げられているのが、今朝の旧約聖書の詩編 16 編です。詩編 16 編 10 節にこう記されています。

27 あなたはわたしの魂を陰府に渡すことなく

あなたの慈しみに生きる者に墓穴を見させず

というダビデの言葉です。そしてこの言葉をルカは使徒言行録 2 章 27 節で、聖霊降臨の後のペトロの長い説教の中で引用しています。こうです。

27 あなたは、わたしの魂を陰府に捨てておかず、

あなたの聖なる者を 朽ち果てるままにしておかない。

復活の主の現れ

パウロは自分が伝えた言葉を「しっかり覚えていれば、あなたがたはこの福音によって救われます」（2 節）といいきっています。パウロはこの復活理解の大切さを強調するために、復活の主が「ケファに現れ、その後十二人に現れたこと」（5 節）を伝えています。パウロは、復活の主の「現われ」を、他のどの事柄よりも詳しく語っています。そしてそれを、パウロ自身にも起こった出来事であると語っています。復活の主の現れは、福音理解において決定的なことです。復活の主との出会いが、人間の実存を根底から変革し、教

会を創設する出来事であったからです。パウロ自身が、復活の主との出会いにおいて、神の教会の迫害者から、福音の宣教者・使徒となる大転換をすることになったのです。(9, 10節)ここには「現れた」という言葉が、5節から8節の間に6回も用いられています。復活の主は、五百人以上もの兄弟たちに同時に現れ、そのうちの何人かは今なお生き残っている(5, 6節)と述べ、教会には、これだけキリストの復活を証言する人がいたという事実が語られているのです。しかし、これをもってキリストの復活の歴史的事実を科学的に証明できるかという、そうはいえません。パウロは、この議論を科学的な証明のために行っているのではありません。復活の主が多くの人に表れ、復活の主と出会った多くの人が、主イエスが復活されたということを証する証言者になったという事実だけを強調しているのです。

すべてが恵み

パウロはここで、復活の主との出会いを、彼の回心体験と結びつけて語っています。パウロは復活の主との出会いの体験を、自らの使徒性の根拠として語っています。ここでも、パウロは使徒たちの中で自分は「月足らずで産まれたような」存在でしかない、「使徒たちの中で一番小さい者であり、使徒と呼ばれる値打ちのない者です」といって謙遜していますが、パウロはキリストの復活顕現を見る経験をした使徒として、自分が福音を宣べ伝える資格あるものであることを、主張しているのです。神の教会を迫害していたパウロに復活の主が現れて、ご自身を啓示し、福音を宣べ伝える使徒として召された出来事を、パウロは神の恵みとして語っているのです。イエス・キリストがわたしたちの罪のために死に、復活された、という知らせは、神の恵みとして与えられるのです。神の教会を迫害する罪深きパウロのためにも、キリストが死んでくださり、復活してくださったということ、パウロは復活の主との出会いにおいて深く知らされたのです。パウロは何も恐くないのです。すべてが感謝、すべてが恵みの人生に変わったのです。使徒の中で一番小さい者であっても、他のどの使徒よりも多く働きました、といえるものとされている喜びを知っているのではあります。

私たちにとって福音(良い知らせ)は、それを告げ知らせる者がいなければ知ることができません。わたしたちにとって、福音は告げ知らされた喜びの使信であるのであります。だから、聞く者もそこに神の恵みが現れていることを信じる信仰が求められるのです。パウロは自らを少しも誇ろうとしません、無に等しい自分が神の恵みによって救われ、召され、他のどの使徒たちよりも多く働くことを許された喜びを語っています。一切は神の恵みだることを、パウロは片時も忘れていないのです。私たちは、パウロが主エスの十字架の死と復活を自分の恵み、自分に与えられ神の恵みと受け止めたことを学びたいと思いま

す。